

美術教育における「共通事項」の実践的研究

- 小学校図画工作科・中学校美術科での実践を通して -

福田 隆眞・福田 哲郎*・西村 優子**

On the Function of Visual Language in the School Art Education

FUKUDA Takamasa, FUKUDA Tetsuro*, NISHIMURA Yuuko**

(Received January 24, 2011)

キーワード：美術教育、共通事項、色と形、イメージ、表現と鑑賞

はじめに

教育課程の改訂にともない、新しい学習指導要領が平成20年に改訂され、平成23年度から完全実施になろうとしている。美術教育では小学校図画工作、中学校美術において、新たに「共通事項」が設けられた。共通事項は、表現と鑑賞の領域に共通する美術の内容を指導するものである。表現と鑑賞の領域の根底に位置づけられる基礎的な美術教育の内容ともいえる。本稿は「共通事項」の学習内容について、小学校、中学校での実践を通して、教材の中にどのように共通事項の学習が含まれているか、事例を提示して述べ、その意義について一考する。

1. 新しい学習指導要領における共通事項について

平成20年の教育課程の方針に基づいて、小学校、中学校の学習指導要領は次のような観点から作成された。

- ①創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること。また、生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心を持って、生涯にわたり主体的に関わっていく態度を育む。
- ②子どもの発達段階に応じて、内容の連続性を配慮し、育成する資質や能力と学習内容の関係を明確にする。小学校、中学校で共通に働く資質や能力を共通事項として示す。
- ③創造性を育む体験の充実を図り、形や色によるコミュニケーションを通して、生活や社会と豊かに関わる態度を育成し、美術の働きを実感させる指導をする。
- ④鑑賞する喜びを味わい、感じ取る力や思考する力を一層豊かにし自分の思いを語ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりする。

*山口大学教育学部附属光小学校 **山口大学教育学部附属光中学校

⑤美術文化の継承と創造への関心を高めるために、主体的に作品を味わう活動や日本の美術や文化に関する指導を一層充実する。

②に示された共通事項は造形要素と視覚言語によってイメージを豊かにすることを促している。具体的には以下のように定められている。

小学校図画工作科の学習指導要領の第1学年及び第2学年では、「ア 自分の感覚や活動を通して、形や色などをとらえること。 イ 形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。」としている。第3学年及び第4学年では、「ア 自分の感覚や活動を通して、形や色、組合せなどの感じをとらえること。 イ 形や色などの感じを基に、自分のイメージをもつこと。」となっている。さらに第5学年及び第6学年においては、「ア 自分の感覚や活動を通して、形や色、動きや奥行きなどの造形的な特徴をとらえること。 イ 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。」としている。

次に、中学校美術科での共通事項は、第3学年まで同じで、「ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること。 イ 形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。」と定めている。

こうした造形要素と造形原理による視覚言語の学習は、専門美術教育の方法として1920年代のパウハウスやヴフテマスをはじめとして、従来の写真による表現方法に加えて、要素の集積による創造の方法を確立してきた。主にデザインの分野との関連を強くもっているが、学習指導要領での共通事項は、戦前の構成教育運動や戦後の狭義のデザイン教育の方法で捉えられた知性や方法論に偏った表現として捉えるのではなく、表現のための要素や方法が人間の感情と結びついて、イメージを豊かにし、表現と鑑賞の学習の基盤となると捉えられる。

以下では、小学校、中学校の美術教育の具体的事例を採り上げて、共通事項の内容と意義を考える。

2. 小学校図画工作科における実践

2-1 絵画表現領域での実践

題材名 「見て、わたしの『お話』～伝えたいことを描こう～（第2学年）

2-1-1 目標

- (1) みんなに伝えたい「お話」（体験や思い出）を、形や色、表現方法を工夫して絵に表し、表現を楽しむことができるようにする。
- (2) 絵本の場面絵を鑑賞して伝わってくることを話したり、形や色、表現方法の工夫に込められた作者の意図を見出したりできるようにする。

2-1-2 学習の展開（総時数 8時間）

<第一次> みんなに伝えたい「お話」を文章で表した後で、絵に表す（3時間）

- (1) みんなに伝えたいことを作文に書く。
- (2) 作文を読んで、絵に表すもの（モチーフ）に赤丸をつける。
- (3) 作文をもとに、B5の画用紙に「お話」を絵で表現する。（第二次で配色に着目し再表現する子どもがいることを予想して、色を付ける前にコピーをとっておく）

<第二次> 絵本の場面絵を鑑賞し、自分の絵に工夫を加える（4時間）

(1) 絵本の場面絵を鑑賞する。

場面絵のコピーを渡し、気になったところにシールを貼って、互いに比べるよう指示した。(図1) シールは5個に限定することで、個々のこだわりが表出すると考えた。子どもは色と形(表情や人物のポーズ等)に着目して、その意図を考え始めた。

そこで、教師は子どものシールを手掛かりに、色や形に着目している子どもを指名し、気になった理由を問うた。(図2) 子どもは次のように語った。

- 空の色や建物が黄色いのはどうしてかなあ。
- 鼻を大きくしている人もいるから、何か香りがするのかな。
- 口をあけて空を眺めている人が、たくさんいるよ。みんな、おながが、すいているのだろう。

このような活動を通して、形や色を工夫することで、気持ちや雰囲気を伝えることができることに気付かせたいと考えた。



図1 気になったところを比べ合う子ども



図2 気になった理由を述べる子ども

(2) 「お話」を絵で表現する。(再表現)

色を変えたい子どもには下描きのコピーを渡し、構図を変えたい子には、白紙を渡した。

絵本の鑑賞でとらえた、色や形の工夫を取り入れようとした子どもが多かった。

図3のように背景の色を変えた子どもは、変えた理由を次のように語っていた。

前は、部屋の壁の色が茶色だから、背景を茶色にしていた。サッカーで日本が勝って、うれしかったから、明るくしたかった。

この子どもは、絵本の鑑賞を通して、背景を感情や雰囲気に合わせて、実際とは違う色を配することのよさを知り、自分の表現に取り入れたのである。

また、図4のように変化を加えた子どもは、次のように語っていた。

教生先生とのお別れがとてもさみしかったら、さみしがっている友達を増やそうと思った。教生先生が黒板の前に座っていたから、背景に黒板をかいた

この子どもは、絵本の鑑賞を通して、同じポーズや表情の人物を多くかくことで、その時の感情

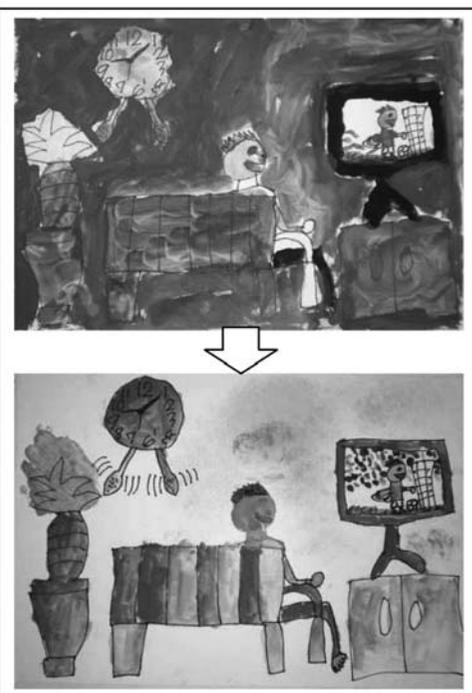


図3 背景を変化させた作品

や雰囲気が伝わりやすいということを知り、自分の表現に取り入れたのである。また、背景にも寒色を配し、さみしさを強調することにも成功している。これも、絵本の鑑賞で、雰囲気を色で伝えよるよさを見出した結果だと言える。

(3) 相互鑑賞をした後、絵を仕上げる。

一人一人の表現意図を感じとることができるように、作文、第一次の絵、本時の絵を比較できるように置き、互いの作品を鑑賞し合った。ここでは、形や色に着目させ、よさやおもしろさを見つけて、ワークシートにコメントを書かせた。友達に認めてもらうことで、子どもは自分の表現に自信をもち、完成へ向けての方向性を確認することができたと考える。

<第三次> 互いの作品を鑑賞する（1時間）

作品を掲示し、作品から伝わってくる「お話」を想像しながら、鑑賞するよう投げかけた。そのうえで、工夫しているなど感じたところを、ワークシートに書くように指示した。

図5の作品を鑑賞した子どもは、形や色のよさを見出し、ワークシートに次のように感想を書いていた。

<形に着目した感想>

○にここにこしているから、たのしいんだね。

<色に着目した感想>

空の色が、あざやかでよい。

カラフルな色だね。

すごく明るくてたのしそう。

いろんな色をうすくしたり、こくしたりしているところがよいね。

(個々の感想をまとめたもの)

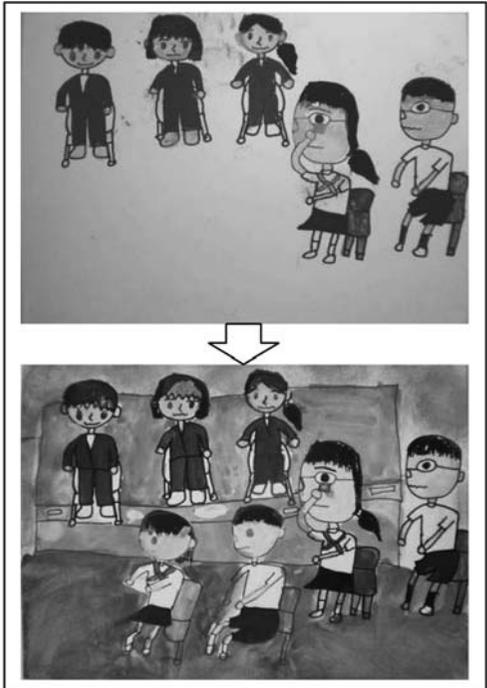


図4 人物をかき加え、背景を変えた作品

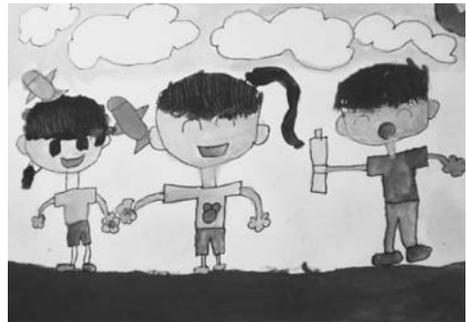


図5 「岩国きち」

2-1-3 学習の結果

この学習を通して、子どもは、絵本の鑑賞で形や色のよさをとらえ、自分の表現に生かすことができた。このことは、約8割の子どもが色や形に着目して、絵に工夫を加えていたことからわかる。絵本の場面絵は話に沿ったものであり、人物の気持ちや場面の様子を如実に表現しているため、大変効果があったと言える。

また、相互鑑賞を通して、見方や感じ方が交流でき、視野が広がった。例えば、色に着目していた子が、形に関するコメントをもらい、鑑賞の視点が増えた。さらに、この視点が自分の表現へもつながり、構図を変える子どもや、人物の表情を変える子どもが見られ

た。つまり、鑑賞の視点が表現のヒントとなり、イメージが広がったと言える。

しかし、低学年の子どもは、よいものを積極的に取り入れていこうとする意識が強いため、鑑賞のインパクトが強すぎると、みんなが似たような作品になる可能性がある。子どもの自由な表現を大切にするために、様々な作品に触れ、視野を広げていくことが大切であると考えます。

2-2 立体表現領域での実践

題材名 「紙のへんしん」(第2学年)

2-2-1 目標

- (1) 紙の加工に興味、関心をもち、楽しく平面材を立体にすることができるようにする。
- (2) 紙という素材のよさを生かして、つくりたいものを決定し、切り方や曲げ方、つなぎ方を工夫して表現できるようにする。
- (3) 友達の表現のよさに気付いたり、自分の活動を振り返ったりできるようにする。

2-2-2 学習の展開(3時間)

<第一次> 紙の切り方や曲げ方、つなぎ方を工夫して立体作品をつくる(2時間)

- (1) 紙を切って、曲げて、つなげ、立体的な形をつくる

この題材では、一枚の画用紙に、はさみで自由に切込みを入れて、端と端をホチキスでつないでいくことで、平面的な紙が立体へと変化していく面白さを味わわせることをねらいとしている。

そこで、まず、白い四つ切画用紙を一枚与え、切り離さないように、切込みを入れさせた。ここでは、3分間という時間制限を設け、できるだけ多く、面白い形の切込みを入れようと投げかけ、子どもの意欲を掻き立てた。

次に、切ったものを曲げたりひねったりして、ホチキスでくっつけていくように指示した。ここでも時間制限を設け、何か具体的な形をねらっているのではなく、思いつくままに手を動かし、紙を立体へと加工できるように配慮した。(図6)

そして、できた立体を互いに鑑賞し合い、よさや面白さを見つけるようにした。このとき、矢印型の付箋紙に気付きや感想を書かせ、自分が見た方向がわかるように机の上に貼らせた。こうすることで、様々な角度から作品を見つめさせるとともに、互いの見出したよさや面白さを共有させようと考えた。(図7)

子どもは、形に着目し、次のような気付きや感想を書いていた。

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| ○トンネルになっているから、おもしろい。 | ○前から見ると、きょうりゅうみたい。 |
| ○すべり台みたいなきかけが、いっぱいだね。 | ○横から見ると、ちょうちょうみたい。 |



図6 切って、曲げて。つなぐ



図7 相互鑑賞

(2) 立体的な紙を何かに見立てて、作品をつくる

前時につくった立体を何か具体物に見立て、自分のイメージを立体に表現した。ここで子どもは、前時、友達に見出してもらった形のよさを見立てのヒントとして、具体的なイメージを抱くことができた。そして、自分のイメージを形に表そうと、別の紙を貼り付けたり、色をぬったりしていた。

<第二次> 互いの作品を鑑賞する（1時間）

ここでは、友達作品を見ながら、形や色に着目させて、感想をワークシートに書かせた。見立ての生かし方を互いに評価する姿が多く見られた。

図8の作品には次のような感想が寄せられた。

- めいろみたいで楽しそうだね。ここで本当にあそんでみたいよ。
- カラフルな色紙をつかって、楽しそうなあそびばになったね。

また、この作品をつくった子どもは、次のように感想を述べていた。

「めいろみたい」って描いてくれていたので、あそびばにした。明るい色紙をはって、楽しくしたかった。



図8 「ふしぎなあそびば」

2-2-3 学習の結果

前時、白い立体を眺めて、図9の作者が次のようにコメントしている。

○上から見たら、ふねの形に見えた。

一方、友達からは、次のような感想が寄せられていた。

- ゆりかご？
- やきいも？
- ボートみたい。
- 貝みたい。
- 上から見るとラップみたい。
- 下から見ると、魚に見える。

最初、「ふね」に見立てていた作者は、友達の感想を参考にして、「貝」にすることにした。

つまり、作者は、友達が見出した、形を基にしたイメージから、発想を広げ、自分のイメージを形成したのである。作者は、最後の感想として、次のように述べている。

はじめ、わたしは、ふねに見えたので、ふねにしようと思っていました。でも、「貝みたい」って書いてくれていたのを見て、だんだん貝に見えてきました。だから、色紙をつかって、きれいな貝をつくりました。

このように、鑑賞で形や色をとらえ、そのよさを互いに共有させていくことで、イメージが豊かになり、表現の幅が広がったと言える。



図9 「ぐるぐるまき貝」

3. 中学校美術科における実践

3-1 題材名「日本の美術と世界の美術」

3-2 目標

- (1) 擬人化や象徴、約束事のある存在という視点を得て、作品の見方を広げることができる。
- (2) 対話型の鑑賞によって、モチーフやテーマなどについて深く考えることができる。
- (3) 日本や海外の作品を鑑賞することを通して、その違いと共通点に気づくことができる。

3-3 学習の展開（総時数 約3時間）

3-3-1 「紅白梅図屏風」尾形光琳（1時間）～擬人化されているモチーフ～

この授業は、「紅白梅図屏風」尾形光琳（図1）を鑑賞することを通して、日本絵画のモチーフが色や形によって擬人化されている視点を得るとともに本単元の学習に興味をもつことをねらいとした。

「紅白梅図屏風」尾形光琳を取り上げた理由はこの作品の諸説にあるように白梅、紅梅が擬人化されているからである。また、本校使用の教科書見開きに図版が大きく掲載されており、生徒一人一人が細部までみるのが可能なためである。さら



図1 「紅白梅図屏風」尾形光琳

に、この授業は単元の1時間目であり、対話型鑑賞法のオリエンテーションとしての要素も必要であった。モチーフの数があまり多くないこの作品は生徒がモチーフのひとつひとつを集中してみることでできる作品であり、見方や発言の仕方などを確認しながら進めることでできる作品だと考えた。

表1 生徒の反応（「紅白梅図屏風」）※網掛けは教師が予想していなかった反応

モチーフ	着目した色・形	色・形からイメージしたもの	イメージから考えたテーマ等
梅	丸く粒のような点 緑色の点々 花の色の紅白	まだ咲いていないつぼみの梅 → 苔 めでたい 人の性格（白梅…静かな人、紅梅…陽気な人） 紅梅…赤～血～死、白梅…生 →	春前の風景（金色の背景とともに） 春の訪れ 川は三途の川（黒っぽい色の川とともに）
	垂れ下がる枝（白梅） 上に伸びる枝（紅梅） 幹の太さ	紅梅…緊張した人かお酒を飲んだ人 老いた人、曲がった性格 → 若い人、まっすぐな性格 木の年齢、人の性格	人の人生 （川の渦のような模様とともに）
川	渦のような模様	川の流れ 時間の流れ → いろいろな事があった（人生の困難） 髪の毛が流れている	人の人生 いろいろなことがあった人生（梅の木の枝ぶりや太さとともに）

	三角形の形	上流からの流れ 遠近法が使われている 道	
	黒っぽい色	三途の川	
その他	敷き詰められた正方形	紙を一枚一枚張り合わせてつくった	(箔については今回学習していない)
	背景の金色	めでたい	春の訪れ(紅白の花の色とともに)
	左右の文字	作者の名前(サイン)	
	印鑑	作者の名前	

【授業を終えての生徒の感想】

○この作品は、一見、風景画だけどそこには深い意味が込められているのだとわかった。
 ○みんなの考えを聞いて、この人は、人を物で表わしていたなんてすごいと思ったし、川の色がいろんなことがあった(人生)って感じの色でいいと思いました。
 ○初めに見たときは、「…何この絵。なんか汚い感じ…」と思ったけど、クラスのみんなど見ていくにつれて、「ちゃんと意味があっただけなんだなあ。」とちょっと感動しました。まさか梅で人、川で時の流れを表わしているとは思ってなかったので、「絵の力はすごい！」と改めて思いました！
 ○最初、私は、木の変化に気がつかなかったけど、授業をうけてみて、右は左よりも若いということが分かり、もっとよく見ていきたいと思った。

生徒たちは色や枝ぶりから梅の木が擬人化されていることを納得できたようであった。鑑賞活動を開始して、しばらくの間は「梅の花である。」「丸い形だからまだつぼみ。」「枝が曲がっている。」など、表面的な観察による発言が続き、対話活動が停滞しはじめた。そこで、「梅の木は何を表わしているのだろうか。」と生徒に問うたところ、ひとりの生徒が「人を表わしている！」(擬人化)に気付いた。そこから、生徒たちは擬人化の視点をもって改めてモチーフを見つめ直し、木の色や枝ぶりの意味や川について深く考えた。最終的に「この作品は全体で何を表わしているのだろうか。」とテーマ(主題)を生徒に問うと、いろいろなことがあった人生という意見に達した。この意見は「紅白梅図屏風」の主説とは異なるが、生徒がモチーフの色や形に注目し考えた結果、擬人化という新しい視点を育て、作品を花鳥画・風景画だけではなくテーマにもとづいた作品という見方ができるようになったことには違いない。作品の見方が広がったといってもよいであろう。

3-3-2 「シャボン玉を吹く童子」フェレンダール～象徴となっているモチーフ～

この授業は、「シャボン玉を吹く童子」フェレンダールを鑑賞することを通して、西洋絵画のモチーフが場合によっては象徴となっていることを理解させたかった。

この作品を取り上げた理由は、描かれているモチーフが擬人化や象徴となっており、前時で学んだ擬人化の知識を活用しながらモチーフをみつめることができ、新たに象徴についても学ぶことができる作品と考えた。また、この授業は対話型による鑑賞の2時間目である。モチーフの数があまり多くないこのような作品に取り組むことによって、生徒がモチーフのひとつひとつをさらに集中してみたり、深く考えたりできると考えた。



図2 「シャボン玉を吹く童子」
フェレンダール

表2 生徒の反応（「シャボン玉遊び」）※網掛けは教師が予想していなかった反応

モチーフ	着目した色・形	色・形からイメージしたもの	イメージから考えたテーマ等
子ども	太っている 姿勢 見上げる 下を向く	大人ではなく赤ちゃん シャボン玉を飛ばそうとしている シャボン玉を潰そうとしている 何かをつかまえようとしている	
	表情	うれしそう 楽しそうではない	
	肌の色 白 黒	天使 悪魔	
	裸	天使 恵まれない子	
	シャボン玉を（楽しそう） つくっている	新しい命をつくっている （シャボン玉…人間の命）	天使が人間界を操っている。
花	色、形 黒ずんで枯れかけ（下に行くほど） 若い花	バラ、スイセン 死にそうな人、死んだ人 若い人	死んだ人の命はシャボン玉の液に変わり天使がシャボン玉にして天国へ送った。 死にそうだから天使が新しい命（シャボン玉）をつくって頑張って生きていくようにしている。（天使やシャボン玉とともに）
	紅い花 白い花	幸せ 不幸（不祝儀のイメージ）	
シャボン玉	上下にある すぐ壊れて消える	上は天国へ、下は地獄へ 人の命 はかない人生	天使が魂の行き先を決めている。 人生ははかない。
花瓶	動物や花の絵		
その他	色が全体的に暗い 下に行くほど汚い感じ	昔の絵 天国と地獄	

【授業を終えての生徒の感想】

○自分が思っていたのとぜんぜん違った。
 ○シャボン玉、1つだけで「はかない」という深い意味があるのはおもしろいなと思った。
 ○シャボン玉をはかない物とか、例えていて絵って深いなあ〜!!!いろんな思いがたまっている!
 ○シャボン玉ってけっこう重要なのだ!!はかない命を表わしている（人生がはかないもの）と今、わたしも思います。何か神秘的ですね!いろんなことが想像できる…（天獄・地獄説も信じます!）
 ○今度から、絵でシャボン玉があったら、はかないことがあったのか考えてみる。

鑑賞活動の初段階では、子どもが何をしているのかということについて意見が集中し、子どもがシャボン玉で遊んでいる場面ととらえていたが、次第に花が枯れていることに注目しはじめ擬人化されていることに気付くことができた。さらに、花の衰えからこの絵に何か秘密がありそうだと生徒が感じた段階で、シャボン玉に注目させ「はかない」ということの象徴であることを伝えた。象徴ということについては鳩（平和）の例も示し理解を促した。シャボン玉の意味を得た生徒達は作品の全体的なテーマを考え出はじめ、最終的に「天使が新しい命をつくって人間界を支配している」という意見や「死んだ人の命がシャボン玉になり、天国へ送られていく」などの意見をまとめた。ここで興味深かったのは作品の構図についても生徒の意識が向いていたことである。「天使が新しい命をつくって…」という意見では図3のように命が画面の中で花→シャボン玉→花と回っている構図になっているという意見や「死んだ人の命…」という意見では図4のように命が画面の上へ上昇し画面外へ出ていくという構図になっているという意見が出てきた。

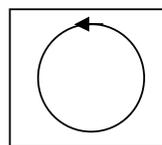


図3

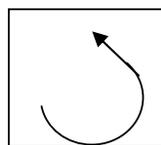


図4

3-3-3 「ベアトリーチェ」ロセッティー～約束事の存在～



図5
「ベアトリーチェ」
ロセッティー



図6
「聖母子」
ラファエロ

この授業では、これまでの授業で得た擬人化や象徴の視点を活用して作品をみながら作品の場面を考えたり、他の宗教絵画の作品と比較してみたりすることによって約束事の存在に気づき、その視点をもって、さらに深く作品を味わうことができるようになることをねらいとした。

このねらいを達成するために、マリアの服装の配色を踏襲していると思われる「ベアトリーチェ」ロセッティーを選んだ。この作品には象徴となっているモチーフが多く散りばめられており、生徒がみて様々な事をイメージしたり考えたりできると考えた。まず、図5の「ベアトリーチェ」だけをみせ、その後、図6の「聖母子」と比較してみせた。

表3 生徒の反応（「ベアトリーチェ」）※網掛けは教師が予想していなかった反応

モチーフ	着目した色・形	色・形からイメージしたもの	イメージから考えたテーマ等
中心の女性	表情	祈っている 悩んでいる(悲しいイメージ) キリスト教の神父の服装	女性が願いをし、願いが通じて赤い鳥が使者として救いに来ている。(赤い鳥とともに)
	服装(赤)		
赤い鳥	頭に輪 花をくわえる	天使	天使的な存在の鳥が悩んでいる女性に幸せを運んでいる。
花	ケシの花	アヘン(麻薬) ※このことについては、生徒が事前に社会科で学んだ19世紀のイギリスやアヘン戦争のことについて、教師が触れた。	女性がアヘンを吸い過ぎて、自分で空想上の鳥が出てしまった(薬による幻覚)

表4 生徒の反応（「ベアトリーチェ」「聖母子」と比較して）※網掛けは教師が予想していなかった反応

モチーフ	着目した色・形	色・形からイメージしたもの	イメージから考えたテーマ等
中心の女性の服	赤と緑	対照色の組み合わせ(目がチカチカする、目立つ組み合わせ) 国旗 クリスマス(イエス・キリストの誕生日) マリア	女性もマリアみたいなお母さんになる予定だったが、子どもは死んでいないから、かわりに赤い鳥を描いている。 マリアは神様の存在なので、マリアの力を借りて死んだ赤ちゃんを呼び戻したいという絵。 マリアと同じ服を描くことで、女性が亡くなった後はよいお母さんになって欲しいという絵。

【授業を終えての生徒の感想】

- この絵はパッとみただけでは、一つ一つのものに関係がないようにみえるけど、実は一つ一つに意味があったんだと思った。
- 初めて見た時は何をえがいているかわからなかったけど、一つ一つの物について考えるほど絵の背景がわかってきた。
- 僕は女の人が死ぬ前に今までのきおくを思い出しているように感じました。
- 女の人が今にも死にそうな感じがする。
- なんだか悲しいような感じがする。でも、神聖な感じもする。
- 絵にすごい意味がつまっていてすごいと思った。

初めの段階では、女性の服装や行動に注目し、女性が何をしているところかの話が主であった。服の形から神父のようだと、キリスト教とのかかわりを見出している生徒もいた。次に鳥に注目し始め、頭上に輪があることから天からの使者（天使）とイメージをふくらませ、花は幸運の象徴ととらえた。ここで、社会科での学習も想起させ（19世紀、イギリス、アヘン戦争）ケシの花の意味について気付かせた。この作品の場面についてより深く考えさせるには新たな視点が必要な状態である。そこで、女性の服装に注目させるため、ラファエロの「聖母子像」を「ベアトリーチェ」と並べて提示し「何か気付きはないか。」と問うた。生徒は女性の服の赤と緑の配色に注目し、その理由を対照色の組み合わせで目立つからであると述べた。既習の内容を参考に考えたのである。ここで、赤と緑の組み合わせからクリスマス、クリスマスは何の日であるかたずねることによってキリストやマリアに気付かせ、マリアの服の配色（赤と緑）とキリスト教の関わりについて理解を促した。少し欲張った授業の内容ではあったが、生徒達は最終的に表4のような「ベアトリーチェ」のテーマに触れる意見をまとめることができた。

3-4 学習の結果

各時間において作品に描かれているモチーフに注目して鑑賞活動を進めていった。生徒はそれぞれのモチーフの色や形に注目し、その色・形そのものから、また、他のモチーフとの関わりや日常生活、既習の内容（他教科を含む）との関わりからイメージを広げ、作品のテーマについて考えをまとめることや作品の構図について着目することができるようになった。このような鑑賞の方法は分析的すぎるかもしれないが、感想にもあるように、はじめは何が描かれているのかわからなかった生徒が、テーマも含めて何が描かれているかわかるまたはわかりそうだという手応えを感じ、もっとよく作品をみたり考えたりしてみようという意欲にもつながっている。また、色や形について考えることは、個々の造形要素と作品全体のイメージとの関わりを考えやすくするというのを改めて感じた。例えば、対照色の組み合わせだから目立ってみえるなどである。このことは、鑑賞の活動だけでなく制作の活動においても活用できるものである。色や形、材質感などの造形的な要素に注目し考えることは、鑑賞で習得したことを生かして制作に取り組むことや、制作で習得したことを生かして作品をより深く味わい楽しむことを容易にするものだと実感した。

今後の課題としては、鑑賞において生徒たちが紡ぎ出すテーマと作品について定説をどのように扱っていくか、また、制作において、特に発想段階において色や形、材質感などをどのように扱っていくかが課題である。

4. 表現力、鑑賞力のための共通事項の内容

共通事項は図画工作、美術の授業の表現分野においても鑑賞分野においても学習の基礎の一つである。具体的な色や形を意識しながら児童生徒のそれぞれのイメージを形成するための方法であり、手段である。本研究において、例えば小学校2学年の学習の結果から見ると、8割の児童がお話を絵に表す場合、色や形に着目して絵の表現に工夫を施している。場面をイメージして工夫をするための具体的方法として色や形を使っているのである。また、同じく2学年の紙による立体では、形の見立てを行うことでイメージを膨らませている。こうした表現の題材において鑑賞を行う場合にも、表現の活動で体験した色と形のイメージが鑑賞活動を豊かにしている。

中学校では鑑賞の題材において共通事項の研究を行った。ここにおいては同時に言語活動の充実という学習の目標も含まれていると考えられる。一見、難解そうな絵画の鑑賞においても言語を通した主題の解説や美術に関連する用語を用いて、鑑賞活動を進めることで、内容理解だけでなく、そこからの連想や発想にも繋がる。そしてこのことは表現の学習においても役立つものとなっていくのである。

図版出展

図1) 「美術2・3上」, 日本文教出版, 平成22年

図2) [http:// www.hermitagemuseum.org](http://www.hermitagemuseum.org)

図4) <http://www.artcyclopedia.com>

図5) <http://www.tate.org.uk>